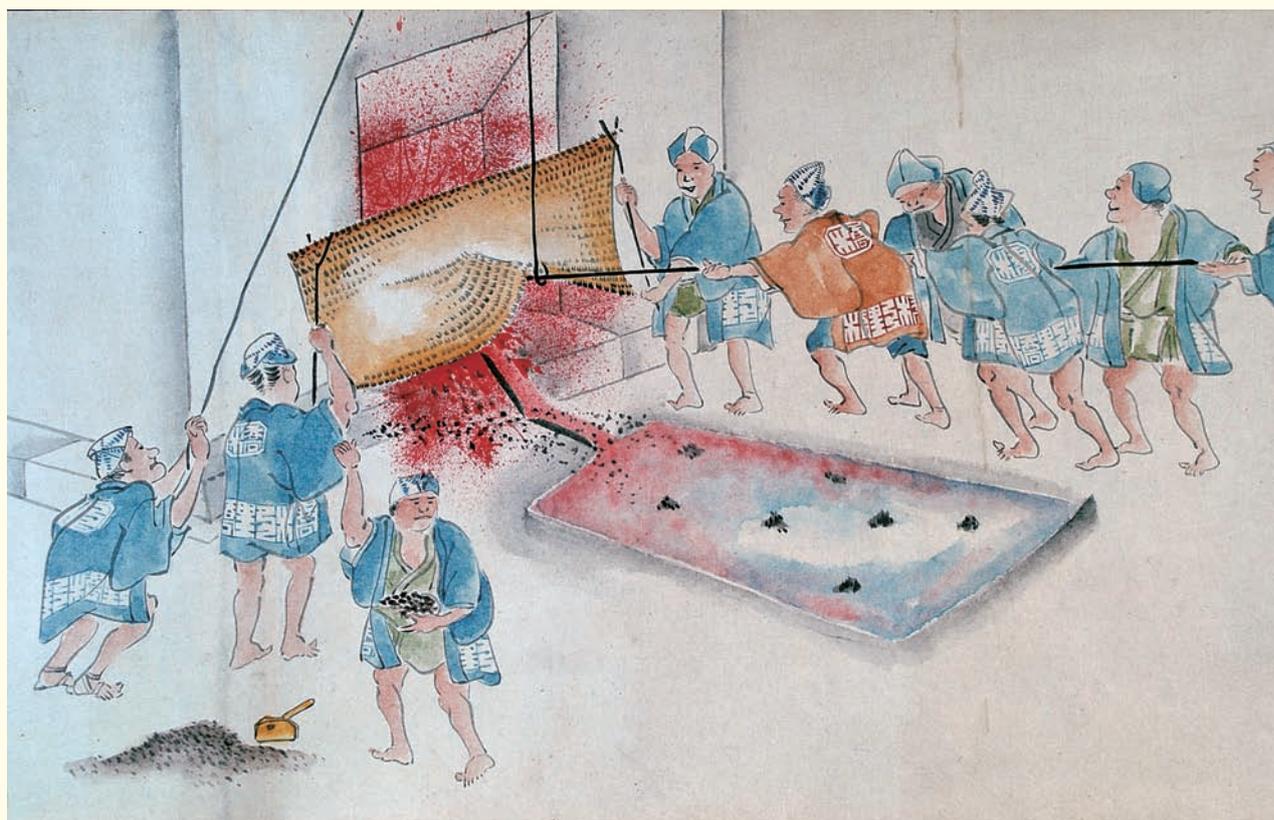


目次／特別展「近代へのとびら－大島高任の挑戦－」から両鉄鉱山御山内並高炉之図（模写）表紙／いわて自然ノート「岩手県の大量絶滅の地層を追いかけて」 p.2-3／展覧会案内「近代へのとびら－大島高任の挑戦－」 p.4-5／活動レポート「冬のワクワク!ワークショップ」 「冬の写生会」 p.6／活動レポート「岩手デジタルミュージアム構築事業－博学連携－」 p.7／インフォメーション p.8

特別展

近代へのとびら－大島高任の挑戦－

平成28年3月26日(土) ～ 5月15日(日)



両鉄鉱山御山内並高炉之図【模写】

(当館 蔵)

釜石において日本で初めての近代製鉄が成し遂げられた自然的・人文的背景を探るとともに、日本近代製鉄の父と称される大島高任のチャレンジに満ちた生涯を振り返り、産業国家日本の原点を探ります。

■いわて自然ノート

岩手県の大量絶滅の地層を追いかけて

学芸員 望月 貴史

■大量絶滅

「絶滅」という言葉を聞いたとき、どのようなイメージを抱きますか？ ニホンオオカミやトキといった近代の動物？ それともはるか昔になくなった恐竜のような動物でしょうか。

ある生物が子孫を残すことなく滅び、地球上から姿を消すことを「絶滅」と言います。今の地球上には我々人間を含む様々な生物が住んでいますが、大昔は今とは全く違った生物が生きていました。これらの過去の生物が時間と共に絶滅していきなくなり、その後新しい生物が出現するという歴史の繰り返しによって、今の生物達の姿があります。しかし、こうした地球の生命史の中では、たくさんの生物がある時期にいったんに姿を消してしまうことがありました。このように、とても多くの種類の生物が同時期に絶滅することを「大量絶滅」といいます。

■大量絶滅の地層

それではなぜ、今から遠い過去の世界で生物の大量絶滅が起きたとわかるのでしょうか？ その証拠は、地層から出てくる化石によって裏付けられます。

大昔に地球上に生きていた生物は、死後堆積物に埋まることで化石として地層中に保存されます。ところが、ある時期に生物の大量絶滅が起きると、絶滅してしまった生物は後の時代に子孫を残すことができなくなるため、以降の時代の地層からは化石が見つかることがなくなります。逆の言い方をすれば、後の時代の地層からある生物の化石が見つからなくなることで、その生物がそれ以前の時代で絶滅した可能性が高くなると言えるわけです。このようにして世界中の地層を調べていくと、ある時期を境にしてそれまで見られていた多くの生物の化石

が見られなくなり、一方でその後の地層からはそれまでに見られなかった生物の化石が新たに産出する時代が存在します。こうした時代には、大量絶滅が起こっていたと考えることができます。

■史上最大の大量絶滅

さて、大量絶滅という言葉を見た時、多くの方が思い浮かべるのは、今から約6600万年前、中生代の終わりに恐竜やアンモナイトなどの生物が絶滅してしまった「白亜紀末の大量絶滅（K-Pg境界の大量絶滅）」ではないでしょうか。実際のところ、この時の大量絶滅はとても大規模なものであり、当時地球上に住んでいた生物の50～60%が絶滅してしまったと言われています。その原因のひとつとして有力視されているのが、現在のメキシコのユカタン半島に直径10kmを超える巨大な小惑星が衝突したことで、地球の環境が大きく変化したという説です。

しかし、この白亜紀末の大量絶滅よりも、もっと大きな規模で生物の大量絶滅が生じた時代があったことは御存知でしょうか。実は、古生代という時代に生物が地球上に大量に出現して以降（^{けんせいだい}頭生代と言います）、生物は何度も大量絶滅を経験してきました。その中でも特に規模の大きかった5回の大量絶滅は「五大絶滅（ビッグ・ファイブ）」と呼ばれています。生命史上最大の大量絶滅はその3回目、今から約2億5200万年前の古生代ペルム紀末に起こりました（P-T境界の大量絶滅）。ペルム紀末の大量絶滅においては、地球上に住んでいた生物の、じつに90%以上（一説によれば96%とも）が姿を消したと言われています。この大量絶滅により古生代を代表する生物とも言える三葉虫や、有孔虫の一種であるフズリナといった生物も姿を消して

しまいました。

■岩手県内のペルム紀末の地層

ペルム紀末の大量絶滅は非常に大規模なものであり、当時の世界中の海で起きたと考えられています。そのため、日本国内でも大量絶滅が生じた当時に堆積した地層を見ることができます。その中には、岩手県内の地層も含まれております。

例えば、2006年に東北大学の研究チームが岩手県岩泉町安家川の上流にある地層（大鳥層）を調べたところ、大鳥層の中にまさに大量絶滅のあった古生代ペルム紀末から、その後の時代の中生代三畳紀へと時間的に連続して堆積してきた地層（ペルム紀（Permian）と三畳紀（Triassic）の頭文字をとって、P-T境界と呼ばれます）が含まれていることが明らかになりました。大鳥層は主に真っ黒いチャートと呼ばれるガラス質の岩石などからなります。チャートは、放射虫というガラス質の殻を持つ生物の遺骸が深海で堆積することでできた岩石です。このチャートを古い時代から丹念に調べていくと、ある地点で黒色粘土岩の層が見られ、この層から三畳紀の地層からしか見られない化石が産出するようになることがわかりました。つまり、この大鳥層の露頭は、大量絶滅によって多くの生物が絶滅してしまった後、生き残ったわずかな生物が再び繁栄を始めようとする



大鳥層の黒色粘土岩層標本



千松層の黒色泥岩

る、まさに転換点となった時代を記録した地層なのです。この安家のP-T境界層は、現在三陸ジオパークのジオサイトの1つにもなっています。

一方、宮城県との県境に近い岩手県一関市藤沢町大籠^{おおかご}においても同様に、ペルム紀末に堆積したと考えられる黒色泥岩の地層（千松層）が露出しています。黒色泥岩というのは、真っ黒い色をしたヘド口のような泥が海底に溜まり、長い時間をかけて石となったものです。この千松層の黒色泥岩を調べると、ペルム紀末の地層からしか産出しない化石が見られることから、千松層は大量絶滅のあったペルム紀の終わり頃に堆積した地層であると考えられています。千松層の黒色泥岩をハンマーで割ると、数は少ないのですが植物や巻貝、二枚貝と考えられる化石が見られます。植物の化石が含まれることや、産出する貝の化石の種類などから、千松層は岩泉町の大鳥層よりも浅い環境で堆積した地層であると考え



千松層の黒色泥岩中の植物化石

ができます。また、こうした生物の一部は、史上最大規模の大量絶滅が生じていた時代にあっても、何とか環境に適応して生きていたのかもしれませんが。

さて、大籠^{おおかご}の愛宕山^{あたごやま}周辺の千松層の露頭を時代が新しい方に向かって追っていくと、ある地点で黒色泥岩が急に灰色をした礫岩や、緑色の砂岩に変化する場所があります。この礫岩（れきがん）や砂岩の地層は平磯層^{ひらいそ}と言い、三疊紀の初め頃に堆積した地層と考えられています。それでは、この大籠の露頭も安家と同じようにP-T境界を含んでいるのでしょうか？ 残念ながら、現段階でははっきりとはわかりません。なぜなら、この礫岩はおそらく「不整合」と言って、ペルム紀の終わり頃に千松層が堆積した後、大地の隆起や沈降が生じ、時間的に間が空いた後に堆積してできた地層と考えられるからです。しかし、実際にペルム紀末からどの位の時間が空いたのか、また本当に時間的な連続性がなかったのかといったことは不明であるため、今後の研究によって明らかにしていく必要があります。

■なぜ生物は大量絶滅したのか？

ここまでペルム紀末の大量絶滅や、その時代の地層についてお話をしてきましたが、それではなぜ生物はこの時期に大量絶滅してしまったのでしょうか？ これまでに、世界中の地質学者がこの謎に挑んできました。その結果、幾つかの有力な仮説が立てられています。

原因の1つとして有力視されている説に、ペルム紀末に世界中の海の酸素が激減してしまったために大量絶滅が生じたというものがあります。海中の酸素が無くなってしまうと、多くの生物は呼吸ができなくなってしまうため、多くの生物が死に絶えてしまいます。その中には、生物の死骸な



平磯層の礫岩

どの有機物を分解して無機物にする役割を持った生物（分解者）も含まれていました。分解者がいなくなると有機物がそのまま海の底にたまり、ヘド口となって残ります。そのヘド口が長い時間をかけて黒色泥岩になったと考えることができます。また、実際に大籠の黒色泥岩の中からは、酸素が少ない環境（還元的な環境と言います）で形成されたと考えられる、黄鉄鉱という鉱物がよく見つかります。

それではなぜ、海の酸素がなくなってしまったのでしょうか？ 1つの説として、ペルム紀末に地球上で大規模な噴火活動が生じたためではないかと言われています。噴火によって大量の火山灰が大気中に撒き散らされ、太陽の光を遮ってしまったために海中の植物プランクトンによる光合成が行われなくなり、酸素が少なくなってしまったとする説です。

しかし、いずれにしてもこれらの説は仮説であり、完全な証拠によって証明されているわけではありません。当然のことながら、2億5200万年前の地球の姿を実際に見たことがある人は一人もいません。大昔の大量絶滅の原因を明らかにするには、地層や化石から得られる情報を地道に集めていくしかないので。もしかしたら将来、岩手県の地層を研究して得られた情報から、大量絶滅の本当の原因が分かる日がくるのかもしれませんがね。

（学芸員 望月 貴史）

■特別展

近代へのとびら —大島高任の挑戦—

会期：平成28年3月26日(土)～平成28年5月15日(日) 会場：特別展示室（一部常設展示室）

2015年7月5日、「明治日本の産業革命遺産 製鉄・製鋼、造船、石炭産業」の構成資産として釜石市の橋野高炉が新たに世界文化遺産に登録されることが決定しました。

今回の世界遺産登録は、非西欧文化圏ではじめて日本が近代化を達成したことが普遍的な価値を有すると評価されたものです。8つの県にまたがる23の資産で構成されています。

橋野高炉は、この構成資産の中でも、ものづくりの国日本が歩み始めた原点を示すもので重要な資産です。

3月26日から開催される特別展「近代へのとびら」展では、橋野高炉建設に大きく関わり、日本の鉱産業界をはじめ各界に大きな影響を与えた大島高任の生涯を振り返ります。また、大島高任を軸に、釜石が日本の近代製鉄発祥の地となった背景や産業国家日本の歩みが理解できるように構成していきます。

簡単に、本展の内容の一部をご紹介します。



ロンドンでの大島高任

I いわたと鉄

岩手の製鉄文化は8世紀には沿岸部にもたらされ、始まったことが分かっています。沿岸部では、多数のたたら製鉄遺跡があり、製鉄関係の遺構・遺物が出土しています。遺物や製鉄炉実物の切り取り資料から沿岸部、北上山地において、古くから製鉄が盛んに行われた自然的・人文的背景を探ります。



大槌燭屋鍛冶絵巻（複製）

II 近代製鉄誕生前夜

鉄鉱石からの製鉄が必要とされた直接のきっかけは異国船の来航でした。特にペリーの来航はその代表的な事件として知られていますが、それ以前から外国船は頻りに日本付近に出没し、三陸沿岸にも現れていました。これに対する幕府や盛岡藩などの動きを古文書や絵図、書籍から見ていきます。



鎌崎砲台場跡

III 近代製鉄の父—大島高任—

大島高任（幼名文治・のち周禎・惣左衛門）は文政9（1826）年5月11日、のちに盛岡藩奥医師となった父大島周意、母千代の長男として盛岡城下仁王小路に生まれました。「高任」を名乗るのは明治2（1869）年以後ですが、ここではすべて

「高任」と記載します。

天保13（1842）年、17歳で江戸に出て箕作阮甫やシーボルト門下で仙台藩の高野長英と同門の坪井信道の日習堂で蘭学を学びました。

本来は医学を修めるのが目的でしたが、留学中に西洋の兵法や砲術、採鉱、冶金を学びました。長崎留学中に、高任は人生を変える一冊の洋書に出会いました。オランダ人ヒューゲニンが著した『ロイク（ライク）王立大砲製造所の鑄造法』（『鉄煩鑄鑑』、『鉄製大砲鑄造法』等の翻訳名）です。周防（今の山口県）出身の手塚律像とともに翻訳に取り組みました。この本は秘蔵とはされず、その他の舶来の書とともに学者が手に取り、数多くの翻訳書が出ています。

長崎遊学を終え、嘉永5（1852）年11月、再度江戸に出て伊藤玄朴の象先堂に入門、主に西洋砲術学を修めました。江戸で研究中の安政元（1854）年に、藤田東湖の推薦により水戸藩に招かれ、那珂湊に反射炉（鉄鉱石を溶かすというよりも鉄の精錬を目的としました。高炉は鉄鉱石から銑鉄を取り出す溶解炉です）を建設し、操業に成功します。高任は最年少でしたが、反射炉築造の事実上の技師長格として一切を指揮しました。



那珂湊の反射炉（復元）

高任は従来の砂鉄銑では大砲の強度に耐えられないという見解から、反射炉に岩銑鉄を供給する目的で、盛岡に戻り、大橋（現釜石甲子町）に高炉を建設しま

した。よく「洋式高炉」の用語が文献に見られますが、高任は単に「高炉」と呼び、この用語を使用し始めたのも高任のようです。

従来のたたら式低炉では、鉄を出すのに3日に一度炉を壊さなければならず、作業能率も低かったのです。

大変間違われやすいのですが、大島高任が初めて高炉を築造したのは橋野ではなく、大橋の地です。大橋で初めて出鉄に成功したのは安政4（1857）年12月1日のことでした。この日付は旧暦で、新暦では1858年1月15日をさします。

大橋高炉の成功をうけ、盛岡藩も藩内の沿岸海防の緊急性から事業として乗り出し、この半年後に橋野高炉を建設しました。橋野高炉は釜石から北へ36kmに位置し、標高560mの山中にあります。大橋から直線距離で約7.3kmの場所です。橋野高炉のうち三番高炉は、盛岡藩御勘定奉行星合治太夫の進言により大島高任の指導のもと、「仮高炉」（試験炉）として建設されました。

のちに一番、二番高炉が新築され、この高炉を改修し「本高炉」として現在の形となりました。日清戦争開戦の明治27（1894）年まで稼働しました。現存する高炉としては日本最古です。高炉1座が次の操業にとりかかるまで30日以上準備を必要とし、一つの製錬所において高炉3座を交互に操業することが効率的でした。

一番、二番高炉は明治元年には錢座を併設しましたが、錢座廃止後は三番高炉のみが稼働しました。盛業時は年間25万貫（約938t）の銑鉄を生産しています。

三番高炉は花崗岩の基壇2段の上に約5.4m四方、高さ2.8mの石組（5段）が積まれており、四隅には縦長の花崗岩が配置されています。当時の高さは約7.0mで、高炉中央に炉底滓ろていさいが残ります。この石組形式は、大橋高炉においても採用されており、初期の高炉の基本形であったと考えられています。

今回の展覧会ではこの三番高炉の本来の姿を絵巻等から読み解き、5分の1の大きさの高さ1.4mの模型で復元を試みます。また、現在の三番高炉の様子のリブリカも同じ縮尺でつくり、並べて展示しますので是非双方を比べてみてください。



製作中の三番高炉レブリカ模型

橋野では、鉱石採掘、製品搬送、製炭、高炉場に合計1000人が作業にあたりま

した。この他に鉱山に付属する労働力として炭焼人夫が働き、原料や燃料の輸送には牛馬200頭を利用しました。

IV 大島高任と日新堂

大島高任の関心は教育や富国強兵策など幅広い分野に及んでいました。盛岡城下に置かれた私学校日新堂の様子を資料から見ていきます。



日新堂創立に係る盟約條の署名

V 明治期の大島高任

小坂銀山における銀生産量日本一の達成や佐渡、阿仁など各鉱山での活躍をはじめ、岩倉遣欧使節団への参加、工学寮（現東京大学工学部）設立提言など、明治維新後の大島高任の足跡をたどります。

VI 大島高任と産業国家日本

那須野の開拓や初代日本鉱業会会長就任など、晩年でも活躍を重ねた高任が産業国家日本の形成にどのような役割を果たしたのか、様々な資料から探ります。

（専門学芸調査員 笠原 雅史）

関連行事のご案内

◆県博日曜講座 各回とも13:30～15:00 当日受付・聴講無料

①3月27日(日)「日本史の中の釜石鉱山」 講師：笠原雅史（当館学芸員）

②4月10日(日)「エクスカージョン『釜石』～2つのコースで釜石をめぐる～」 講師：中山 敏（当館館長）

③4月24日(日)「世界遺産としての橋野高炉」 講師：小野寺英輝氏（岩手大学工学部准教授）

◆鑄物体験 3月26日(土) 13:00～16:00 体験学習室 高校生以下 講師：平塚貞人氏（岩手大学工学部教授）

◆製鉄体験 3月27日(日) 9:30～15:00 当館正面玄関前

◆展示解説会 各回とも14:30～15:30 当日受付・要入館料 ①4月3日(日)、②4月23日(土)、③5月14日(土)

■事業報告

冬のワクワク!ワークショップ

平成27年12月23日(水・祝)

今年度の冬の児童向け工作教室「冬のワクワク!ワークショップ」を12月23日に行いました。当日は児童、保護者あわせて212名の方にご参加いただき、大盛況となりました。

今年度のワークショップでは、「化石のレプリカづくり」と「まが玉アクセサリー」の二つのプログラムを実施しました。

「化石のレプリカづくり」では、アンモナイトと三葉虫の実物の化石をもとにして作成した石膏^{せっこう}に色を塗り、本物そっくりのレプリカを作りました。参加した子どもたちはみな意欲的に色を塗り、どれだけ本物の化石のように作ることができるかという作業に熱中していました。作業が終わった後は、当館学芸員による実物の化石を使った解説を行いました。本物

のアンモナイトや三葉虫の化石を触ることができ、子ども達だけでなく、保護者の方も楽しんでいかれる様子が見られました。

「まが玉アクセサリー」では、色を塗った樹脂粘土をこねて、まが玉の首飾りを作りました。縄文人が作った本物のまが玉の形になるように作るの難しい作業でしたが、子ども達それぞれの個性の出るオリジナルのまが玉アクセサリーを作ることができました。作業を終えた後は、当館の解説員が作成したまが玉アクセサリーを身につけて、縄文時代の北上市を想像して描かれた大きな一枚絵の前で記念撮影をしました。縄文人になった気分写真に写る子ども達の姿が多数見られ、とても盛り上がりました。



化石のレプリカづくりの様子

当館ではこうした児童向けのワークショップをこれからも開催していく予定です。作業を通して大昔の岩手県にいた生物や、暮らしていた人々の生活に思いをめぐらすことのできる機会を提供できればと考えておりますので、今後とも多くの方のご参加をお待ちしております。

(学芸第二課 望月 貴史)

■事業報告

冬の写生会

写生会 平成27年12月19日(土)～平成28年1月17日(日)

作品展示 平成28年1月23日(土)～平成28年2月14日(日)

冬休み期間に合わせ、毎年開催している「冬の写生会」。今年もたくさんの子もたちがお絵かきを楽しんでくれました。

博物館から見える美しい景色や展示資料を描くことで、博物館に興味をもってもらい、更に楽しんでほしいという思いから始まったこのイベントも、今年で10回目となりました。

一番人気はやっぱり恐竜!マメンキサウ



チャグチャグ馬コの飾りを丁寧に…真剣です!



大好きな恐竜をかつこよく描くぞ!

ルスを画用紙いっぱい描いたり、化石の細かなところまで驚くほど丁寧に描いたり、恐竜と自分を仲良く一緒に描いたり…。楽しい絵がたくさん出来上がりました。開催期間中は天気の良い日が多かったため、「あのお山、きれい!」と言いながら、岩手山を描いてくれた子どもさんもたくさんいました。

完成した作品は、1月23日から2月14

日まで館内に展示し、たくさんの来館者の方にご覧いただきました。「上手に描いているね」「かわいらしい絵だね。」など、子どもたちの作品は来館者に大好評。



「博物館でお絵かき」という、いつもと違った楽しみ方ができる「冬の写生会」。

次回もたくさんの子もたちのご参加をお待ちしています。

(総務課 伊藤 聡美)

■活動レポート

岩手デジタルミュージアム構築事業—博学連携—

協力校：岩手県立岩泉高等学校、岩手県立宮古高等学校、岩手県立大槌高等学校、岩手県立高田高等学校

1 事業の主旨と経緯

岩手デジタルミュージアム構築事業は、大津波で被災した北三陸太平洋沿いの歴史文化を伝承し、解明する上で重要文化財を劣化の進行から守るために、文化財が有する学術情報をデジタル情報として保全するために、文化庁の補助で実施されています。

文化財や学術情報を守るだけでなく、被災地の博物館機能再生や、当分の間博物館の再生が見込めない場合においても博物館の機能を利用することが可能となるシステムの構築を目指しています。

この事業の一環で、沿岸の高等学校4校に協力いただき、昨年から2年間にわたり博物館資料画像の教材化や授業での活用等に取り組んできました。

ここでは今年度の具体的な活動の内容の一部を高校ごとに紹介いたします。

◆高田高等学校

協力校の中では最も早い7月3日に1,2年生85名が博物館を見学しました。

見学では実際に土器に触るなどして学芸員の説明への理解を深めていました。その他、平泉を含む歴史の展示室、修復館を見学しました。

◆岩泉高等学校

岩泉高校では10月27日に協力校の教諭が教材資料画像を使って授業を行い、2日後の10月29日に博物館を実際に見学しました。



事前授業では縄文から古墳時代の内容

と太平洋戦争下の岩手についての内容を学び、あわせて岩手の歴史について理解を深めました。

後日の博物館の見学では、考古・歴史・民俗の総合展示室と修復館を見学し、体験学習室で実際に機織や、鎧の着用などの体験学習を行いました。



◆宮古高校

7月31日、博物館の教室で当館所蔵の『後三年合戦絵巻』の資料画像を使用し、「後三年合戦絵巻を読む」というテーマで協力校教諭が39名を対象に授業を行いました。昨年も「江戸時代の貨幣」をテーマに授業を行っています。



また、同日に解説を聞きながら総合展示室やバックヤードを見学しました。



11月27日にも、博物館学芸員が日本史

A選択者18名を対象に「戦時中のいわて」と題し、授業を行いました。

◆大槌高等学校

11月16日に学校で1年生76名を対象に博物館学芸員が、宮古高校と同様に「戦時中のいわて」をテーマに事前授業を行いました。



4日後の11月20日、授業を受けた1年生が博物館に来て見学しました。大槌高校は、岩泉高校と同様の内容で行いました。



2 事業を終えて

アンケート結果では、今回の事業に参加した259名のうち、239名の生徒が資料画像の活用が学習に有益であると回答しました。また、「今後も博物館を利用したい」「学校と博物館の連携を密にして欲しい」「今後もこのような事業を行って欲しい」との声が多く聞かれました。

今後は作成した教材資料画像をはじめ各教材が4校以外の高校や小学校、中学校でも活用ができるように体制を整えていく予定です。

(学芸第二課 笠原 雅史)



岩手県立博物館

IWATE PREFECTURAL MUSEUM

インフォメーション (2016.3.1~2016.6.30)

お知らせ

●**ゴールデンウィーク臨時開館**
ゴールデンウィーク期間中の5月2日(月)は臨時開館します。4月26日(火)～5月8日(日)は無休、翌5月9日(月)は休館です。

国際博物館の日

●**入館無料** 5月18日(水)
5月18日(水)の国際博物館の日は入館無料となります。
●**国際博物館の日記念 県博バックヤードツアー (事前申込制)**
5月15日(日) 要事前申込 (応募者多数の場合は抽選)
ふだんは見られない収蔵庫などを特別にご案内します。いずれかのコースを選んでお申し込みください。なお、岩手県立博物館友の会会員対象コースは学芸員体験のメニューも含まれます。
・友の会会員対象 (所要時間約70分、各回定員8名)：①自然コース 10:40～、②歴史コース10:50～、③文化財コース11:00～
・一般対象 (所要時間約60分、各回定員10名)：④自然コース13:30～、⑤歴史コース13:40～
募集期間：4月4日(月)～4月29日(金)必着
応募方法：往復はがきに①参加希望コース、②住所、③参加者全員の氏名、④電話番号、⑤友の会会員は番号を明記の上、当館「県博バックヤードツアー係」宛に郵送してください。

展覧会

●**特別展「近代へのとびら一大島高任の挑戦」**
平成28年3月26日(土)～5月15日(日) 特別展示室ほか
近代製鉄の父と称される大島高任のチャレンジに満ちた生涯を振り返り、時代を切り開いた各分野の功績を紹介します。
■**展示解説会** 特別展示室 要入館料 各回とも14:30～15:30
①4月3日(日)、②4月23日(土)、③5月14日(土)
■**関連講座** 講堂・教室 無料 各回とも13:30～15:00
県博日曜講座の欄をご覧ください。
■**鋳物体験** 体験学習室 無料 当日受付 高校生以下150名程度
3月26日(土) 13:00～16:00
講師：平塚貞人氏 (岩手大学工学部マテリアル工学科教授)
■**たたら製鉄体験** 屋外正面玄関前 無料 当日受付 小学生以上
3月27日(日) 9:30～15:00
講師：留畑昌市氏 (元釜石市鉄の歴史館館長)
※詳細はp.4-5展覧会案内記事をご覧ください。
●**第67回企画展「国立科学博物館コラボミュージアムin盛岡 古生代の大量絶滅と回復 一進化の影と光」**
平成28年6月7日(火)～8月21日(日) 特別展示室
古生代末に生じた史上最大の生物大量絶滅事件を中心として、古生代に起きた3回の大量絶滅について紹介します。
※詳しくは次号でご紹介します。

県博日曜講座

第2・第4日曜日 13:30～15:00 当日受付 聴講無料
当館学芸員等が岩手の文化や歴史、自然について解説します。
*展覧会関連講座
3月13日「ジオパークで再発見！三陸の魅力」
杉本伸一氏 (三陸ジオパーク推進協議会 上席ジオパーク推進員)
*3月27日「日本史の中の釜石鉱山」
笠原雅史 (当館学芸員)
*4月10日「エクスカーション『釜石』～2つのコースで釜石をめぐる～」
中山 敏 (当館館長)
*4月24日「世界遺産としての橋野高炉」
小野寺英輝氏 (岩手大学工学部機械システム工学科准教授)
5月8日「火山灰から社会をよむ - 聖穴住居のかたち編 -」
丸山浩治 (当館学芸員)
5月22日「中世の南部氏に関する基礎的考察」
佐々木康裕 (当館学芸員)
6月12日「あの世のはなし」
川向富貴子 (当館学芸員)
*6月26日「生命史をひも解く - オールドビス紀・シルル紀 -」
望月貴史 (当館学芸員)

古文書入門講座 (事前申込制)

5月7日(土)～5月29日(日) 毎週土・日曜 全8回 10:00～11:30
江戸時代の寺子屋教科書『子供早学問』などを、基本的なずし字を確認しながら読みすすめていきます。
講師：当館学芸員
定員：30名 ※要事前申込 (応募者多数の場合は抽選)
対象：一般・高校生以上の学生 (初めて古文書を学ぶ方)
募集期間：4月6日(水)～4月20日(水)必着
応募方法：往復はがきに①古文書入門講座受講希望、②住所、③氏名(ふりがなも)、④電話番号を明記の上、当館「古文書入門講座係」宛に郵送してください。募集締め切り後、返信用はがきで連絡します。

観察会 (事前申込制)

第71回自然観察会「和賀仙人の森の巨人に会いに行こう」
5月22日(日) 8:00～17:00 於、北上市和賀仙人
春の花を楽しみながら、森の巨人「和賀仙人の姥杉」に会いに行きましょう。岩手県立博物館友の会会員限定の事業です。
講師：鈴木まほろ (当館学芸員)

定員：20名 (小学生以上の友の会会員とご家族)
参加費：実費負担 (バス代・3000円程度)
募集期間：4月1日(金)～5月1日(日)定員充足したい締切

第71回地質観察会「釜石鉱山跡をさぐる」

7月3日(日) 10:00～15:00 於、釜石市 現地集合・解散
釜石鉱山坑道跡などを見学し、ズリから鉱物・岩石を採集します。
講師：山澤茂行氏 (釜石鉱山(株)代表取締役社長)
定員：20名 (小学校高学年以上、要保護者承諾)
参加費：実費負担 (傷害保険料ほか)
募集期間：6月1日(水)～6月10日(金) 定員充足したい締切

観察会の申込み方法：往復はがきまたは電子メールで受け付けます。詳細はお問い合わせください。

週末の催し

◆ミュージアムシアター

毎月第1土曜日 13:30～15:00 講堂 当日受付 視聴無料

3月5日「こつなぎ」一般向け (120分/記録)

4月2日「近代製鉄特集」(のべ75分)

近代製鉄発祥150周年記念 ものづくりの灯を永遠に (58分/記録、一般)、鉄腕博士 草野仁の鉄学しよう! (17分/記録/小学生～)

5月7日「連休名作アニメスペシャル」(のべ72分)

アラジンと魔法のランプ、シンデレラ、ピノキオ(各24分/アニメ/幼児～小学生)

6月4日「大人の映画会」

山下清物語 大将放浪記 (117分/劇映画/一般)

◆チャレンジ! はくぶつかん

毎月第2・第3土曜、日曜、祝日 小学生向け 随時受付

チャレンジ! マークをさがして はくぶつかんをたんけん!

3月12日・13日・19日・20日・21日 テーマ：鉄

4月9日・10日・16日・17日 テーマ：山

5月14日・15日・21日・22日 テーマ：緑

6月11日・12日・18日・19日 テーマ：古

◆たいけん教室～みんなでためそう～ (事前申込制)

毎週日曜日 13:00～14:30 幼児(保護者同伴)・小学生20名程度

さまざまな遊びやものづくり、実験を体験してみよう。

※4月から全プログラム有料(材料費代/プログラムごとに異なります)

※要事前申込み。開催日の1週間前の日曜日から電話または博物館で

開館時間(9:30～16:30、休館日を除く)に先着順に受け付けます。

1度に3名まで予約可能です。予約状況・材料費代はホームページ

でご確認ください。

3月	6日 化石のレプリカ 13日 手づくり万華鏡	20日 まが玉アクセサリー 27日 スライムであそぼう
4月	3日 砂絵 10日 石のオリジナルはんこ	17日 こはくの玉づくり 24日 ばねのキツツキおもちゃ
5月	1日 こいのほりーす 8日 手づくり万華鏡 15日 土版づくり	22日 草花のそめもの 29日 チャグチャグ馬コづくり
6月	5日 チャグチャグ馬コづくり 12日 のびちぢみしゃくとり虫	19日 草花のそめもの 26日 化石のレプリカ

定時解説

平日～土曜日 13:30～14:30 / 日曜日 10:30～11:30

解説員が常設展示室をご案内します。そのほかにも随時、解説員が

皆様のご質問や解説のご希望におこたえています。

※他の館内イベントとの兼ね合いでお休みする場合があります。

利用のご案内

■開館時間 9:30～16:30 (入館は16:00まで)

■休館日 月曜日(月曜が休日の場合は開館、翌平日休館)

※5月2日(月)、8月1日(月)、8月8日(月)、8月15日(月)、

10月3日(月)は臨時開館

資料整理日 (9月1日～9月10日)

年末年始 (12月29日～1月3日)

■入館料 一般310 (140)円・学生140 (70)円・高校生以下無料

()内は20名以上の団体割引料金

※5月18日(水)、11月3日(木・文化の日)は無料

※9月19日(月・敬老の日)は65歳以上の方無料

※学校教育活動で入館する児童生徒の引率者は、申請により入館料

免除となります。

※療育手帳、身体障害者手帳、精神障害者保健福祉手帳をお持ちの

方、及びその付き添いの方は無料です。

岩手県立博物館だより 第148号 平成28年3月1日発行	編集 岩手県立博物館 〒020-0102 盛岡市上田字松屋敷34 Tel. (019)661-2831 / Fax. (019)665-1214 発行 公益財団法人岩手県文化振興事業団 〒020-0023 盛岡市内丸13-1 Tel. (019)654-2235 / Fax. (019)625-3595
------------------------------------	---